審査の結果の要旨

氏名　オルティス モヤ フェルナンド

論文題目　Coping with urban shrinkage in post-industrial cities:an international evaluation with case studies of Manchester, Pittsburgh and Kitakyushu
（脱工業都市における縮小への対応 － マンチェスター・ピッツバーグ・北九州市のケーススタディによる評価と考察－）

本論文は、脱工業都市における縮小の過程を分析し、これに対して現在まで講じられてきた対策の批判的な検討を踏まえ、新たな解決方法を提案するものである。 マンチェスター・ピッツバーグ・北九州市という、社会的、政治的文脈が異なる三つの事例の分析を通して本論文では、文脈の違いとは関係なく、三つの都市に同様な対策がとられていることを明らかにした。これらの対策は、主に人口増加を目的とし、多様な社会的要請に対応するものではない。
本論文は、縮小への対応が、人口増加のみならず社会的環境と市民の生活の質の向上を目的とするべきであると主張し、その対応策として、「soft shrinkage」と名付ける社会的な背景を配慮した新たな都市計画の方法論を提言するものである。

本論文は、８つの章から構成される。
第１章では、研究課題の意義を説明し、先行研究をまとめ、未解決な問題を指摘する。そして、論文の主たる目的を明示する。

第２章では、論文の理論的な枠組みを設定する。先行研究を踏まえて二つの異なる理念的なアプローチを融合し、「縮小都市」という概念の新しい定義を行う。そして、この定義に適応した縮小都市の分析方法を提案する。

第３章では、第２章の枠組みを踏まえ、本論文の研究課題を再検討し、従来の研究ではほとんど注目されてこなかった課題の側面を指摘する。そして、具体的な事例の選択基準を示し、その比較検討の方法を提示する。

第４章では、世界の最初の工業都市であるマンチェスターの事例を分析する。マンチェスターは綿産業を背景に爆発的な人口増加を経験したが、産業の衰退に伴う人口流出の結果、都市の人口が最盛期の半分にまで激減した。80 年代以降に講じられた政策は、この流れを逆戻しすることに成功し、マンチェスターの人口増加率がイギリスの第二位に達したことを指摘する。しかしこれらの政策は、都市の社会的問題を深刻化させ、市民の要請に適応していないと結論づける。

第５章では、米国の製鉄産業の中核都市であるピッツバーグの事例を分析する。製鉄産業は人口増加を促す一方、環境汚染ももたらした。そのため、ピッツバーグは世界に先駆けて、1940年代に都市再生を目的とした政策を実行する。しかし、郊外化と脱工業化を背景とした人口流出によってピッツバーグの人口は1950年代の半分に落ちこんだ。このことは、ピッツバーグで採用された、物理的な環境の改善のみを対象とする政策の欠点を浮き彫りにする。

第６章では、北九州市の事例を分析する。都市は、八幡製鐵株式會社を中心に成長し、1980年代まで縮小することはなかったが、産業発展に伴う環境問題に直面する。その後直面する縮小への対応は、大気浄化と持続可能な産業モデルを中心とした政策への取り組みでなされる。日本全体の高齢化とともに北九州市も人口減少が続いているが、このような政策が都市の社会的環境を向上させることに成功したと結論づける。

第７章では、事例の比較検討をもとにした本論文の研究課題について考察を行う。つまり、マンチェスター、ピッツバーグおよび北九州市で現在採用されている政策は、縮小過程に伴う社会的問題が考慮されていないことを指摘し、三つの都市の経済的・社会的文脈が異なるにも関わらず、同様な政策がとられていることが、現在の縮小への対応方法の最大の欠点だと指摘する。人口増加と経済成長を都市の健全性の指標とする現在の政策は、生活の質と社会的環境という計測し難い要素を過小評価していることが最大の課題であると結論づける。一方、三つの都市には、行政の政策と独立した状態で、市民による再生運動が生じていることにも着目する。このような自発的な再生運動は、縮小都市の特別な条件、すなわち、空家や産業遺構の存在が可能にしていることにも着目する。

第８章は本論文の結論である。現在の政策の欠点と自発的な再生運動に関する考察を踏まえて、「soft shrinkage」と名付ける新しい縮小への対応方法を提案する。「soft shrinkage」は、「Non-normative Regeneration」、「Bottom-Up Regeneration」、「Collective Regeneration」、「Radical Re-appropriation of Spaces」という四つの原則に基づく。すなわち、「soft shrinkage」とは、社会的な要素を都市計画のプロセスに導入する方法であると結論づける。

以上のように本論文は、縮小都市の緻密な分析を通じて「soft shrinkage」という新しい対応方法を提案し、世界的な課題である縮小都市の研究に大きな寄与したものと判断できる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。